

花宴

渋谷栄一訳

朧月夜の君物語 春の夜の出逢いの物語

「第一段 二月二十余日、紫宸殿の桜花の宴」

如月の二十日過ぎ、南殿の桜の宴をお催しあそばす。皇后、春宮の御座所、左右に設定して、参上なさる。弘徽殿の女御、中宮がこのようにお座りになるのを、機会あることに不愉快にお思いになるが、見物だけはお見過ごしてできないで、参上なさる。

その日はとてもよく晴れて、空の様子、鳥の声も、気持ちよさそうな折に、親王たち、上達部をはじめとして、その道の人々は皆、韻字を戴いて詩をお作りになる。宰相中将、「春という文字を戴きました」と、おっしゃる声までが、例によって、他の人とは格別である。次に頭中将、その目で次に見られるのも、どう思われるかと不安のようだが、とても好ましく落ち着いて、声の上げ方など、堂々として立派である。その他の人々は、皆気後れしておどおどした様子の者が多かった。地下の人は、それ以上に、帝、春宮の御学問が素晴らしく優れていらつしやる上に、このような作文の道に優れた人々が多くいられるころなので、気後れがして、広々と晴の庭に立つ時は、恰好が悪くて、簡単なことであるが、大儀そうである。高齢の博士どもの、姿恰好が見すばらしく貧相だが、場馴れているのも、しみじみと、あれこれ御覧になるのは、興趣あることであった。

舞楽類などは、改めて言うまでもなく万端御準備あそばしていた。だんだん入日になるころ、春鶯囀という舞、とても興趣深く見えるので、源氏の御紅葉の賀の折、自然とお思い出されて、春宮が、挿頭を御下賜になつ

て、しきりに御所望なさるので、お断りし難くて、立つてゆつくり袖を返すところを一さしお真似事のようにお舞いになると、当然似るものがなく素晴らしく見える。左大臣は、恨めしさも忘れて、涙を落とさなされる。

「頭中将は、どこか、早く」

との仰せなので、柳花苑という舞を、この人はもう少し念入りに、このようなこともあるうかと、心づもりをしていたのであるうか、まことに興趣深いので、御衣を御下賜になつて、実に稀なことだと人は思った。上達部は皆順序もなくお舞いになるが、夜に入つてからは、特に巧拙の区別もつかない。詩を読み上げる時にも、源氏の君の御作を、講師も読み切れず句毎に読み上げては褒めそやす。博士どもの心中にも、非常に優れた詩であると認めていた。

このような時でも、まずこの君を一座の光にしていらつしやるので、帝もどうしておろそかにお思いでいられようか。中宮は、お目が止まるにつけ、春宮の女御が無性にお憎みになつていらしいのも不思議だ、自分がこのように心配するのも情けない」と、自身お思い直さずにはいらつしやれないのであつた。

「何の関係もなく花のように美しいお姿を拝するのであつたなら、少しも気兼ねなどいらなかるうものを」

御心中でお詠みになつた歌が、どうして世間に洩れ出てしまつたのだらうか。

「第二段 宴の後、朧月夜の君と出逢う」

夜もたいそう更けて御宴は終わつたのであつた。

上達部はそれぞれ退出し、中宮、春宮も還御あそばしたので、静かになつたところに、月がとても明るくさし出て美しいので、源氏の君、酔心地に見過ごし難くお思いになつたので、「殿上の宿直の人々も寝んで、このように思いもかけない時に、もしや都合のよい機会もあるうか」と、藤壺周辺を、無性に人目を忍んであちこち窺つたが、手引を頼むはずの戸口も閉まつているので、溜息をついて、なおもこのままでは気がすまず、弘徽殿の細殿にお立ち寄りになると、三の口が開いている。

女御は、上の御局にそのまま参上なさったので、人気の少ない感じである。奥の柵戸も開いていて、人のいる音もしない。

「このような無用心から、男女の過ちは起こるものだ」と思って、そつと上つてお覗きになる。女房たちは皆眠っているのだらう。とても若々しく美しい声で、並の身分とは思えず、

「朧月夜に似るものはない」

と口ずさんで、こちらの方に来るではないか。とても嬉しくなつて、とつさに袖をお捉えになる。女、怖がっている様子で、

「あら、嫌ですわ。これは、どなたですか」とおっしゃるが、

「どうして、嫌ですか」と言つて、

「趣深い春の夜更けの情趣をご存知でいられるのも 前世からの浅からぬ御縁があつたものと存じます」

と詠んで、そつと抱き下ろして、戸は閉めてしまった。あまりの意外さに驚きあきれている様子、とても親しみやすくかわいらしい感じである。怖さに震えながら、

「ここに、人が」

と、おっしゃるが、

「わたしは、誰からも許されているので、人を呼んでも、何ということありませんよ。ただ、じつとしていなさい」

とおっしゃる声で、この君であつたのだと理解して、少しほつとするのであつた。やりきれないと思う一方で、物のあわれを知らない強情な女とは見られまい、と思つている。酔心地がいつもと違つていたからであろうか、手放すのは残念に思われるし、女も若くなよやかで、強情な性質も持ち合わせてないのであろう。

かわいらしいと御覧になつていらつしやるうちに、間もなく明るくなつて行つたので、気が急かれる。女は、男以上にいろいろと思ひ悩んでいる様子である。

「やはり、お名前をおっしゃってください。どのようして、お便りを差し上げられましようか。こつして終わるつとは、いくら何でもお思いではあるまい」

とおっしゃるが、

「不幸せな身のまま名前を明かさないのでこの世から死んでしまつたら野末の草の原まで尋ねて来ては下さらないのかと思います」

と詠む態度、優艶で魅力的である。

「ごもつともだ。先程の言葉は申し損ねました」と言つて、

「どなたであるうかと家を探しているうちに 世間に噂が立つてだめになつてしまふといけないと思ひまして 迷惑にお思いでなかつたら、何の遠慮がいりましよう。ひよつとして、おだましになるのですか」

とも言い終わらないうちに、女房たちが起き出して、上の御局に参上したり下がつて来たりする様子が、騒がしくなつてきたので、まことに仕方なくて、扇だけを証拠として交換し合つて、お出になつた。

桐壺には、女房が大勢仕えていて、目を覚ましている者もいるので、このようなのを、

「何とも、ご熱心なお忍び歩きです」と

と突つき合ひながら、空寝をしていた。お入りになつて横になられたが、眠ることができない。

「美しい人であつたなあ。女御の御妹君であらう。まだうぶなところから、五の君か六の君であらう。帥宮の北の方や、頭中将が気にいつていない四の君などは、美人だと聞いていたが。かえつてその人たちであつたら、もう少し味わいがあつたらうに。六の君は春宮に入内させようと心づもりをしておられるから、気の毒なことであるなあ。厄介なことだ、尋ねることもなかなか難しい、あのまま終わりにしようとは思つていない様子であつたが、どうしたことで、便りを通わす方法を教えまいにしたのだらう」

などと、いろいろと気にかかるのも、心惹かれるところがあるのだらう。このようなことにつけても、まずは、あの周辺の有様が、どこよりも奥まつているな」と、世にも珍しくご比較せずにはいらつしやれない。

「第三段 桜宴の翌日、昨夜の女性の素性を知りたがる」

その日は後宴の催しがあつて、忙しく一日中お過ごしになつた。箏の琴をお務めになる。昨日の御宴よりも、優美に興趣が感じられる。藤壺は、暁にお上りになつたのであつた。あの有明は、退出してしまつたらうか」と、

心も上の空で、何事につけても手抜かりのない良清、惟光に命じて、見張りをさせておかれたところ、御前から退出なさった時に、

「 たった今、北の陣から、あらかじめ物蔭に隠れて立っていた車どもが退出しました。御方々の実家の人がございました中で、四位少将、右中弁などが急いで出てきて、送って行きましたのは、弘徽殿方のご退出であろうと拝見しました。ご立派な方が乗っている様子がはつきり窺えて、車が三台ほどでございました」

とご報告申し上げるにつけても、胸がどきつとなさる。

「 どのようにして、どの君と確かめ得ようか。父大臣などが聞き知って、大げさに婿扱いされるのも、どんなものか。まだ、相手の様子をよく見定めないうちは、厄介なことだろう。そうかと言って、確かめないでいるのも、それまた、誠に残念なことだろうから、どうしたらよいものか」と、ご思案に余つて、ぼんやりと物思いに耽り横になつていらつしやうた。

「 姫君は、どんなに寂しがっているだろう。何日も会っていないから、ふさぎこんでいるだろうか」と、いじらしくお思いやりなさる。あの証拠の扇は、桜襲の色で、色の濃い片面に霞んでいる月を描いて、水に映している図柄は、よくあるものだが、人柄も奥ゆかしく使い馴らしている。草の原をば」と詠んだ姿ばかりが、お心にかかりになさるので、

「 今までに味わつたことのない気がする。有明の月の行方を途中で見失つてしまつて」

とお書きつけになつて、取つて置きなされた。

「 第四段 紫の君の理想的成長ぶり、葵の上との夫婦仲不仲 」

「 大殿にも久しく御無沙汰してしまつたなあ」とお思いになるが、若君も気がかりなので、慰めようとお思いになつて、二条院へお出かけになつた。見れば見るほどとてもかわいらしく成長して、魅力的で利発な氣立て、まことに格別である。不足なところもなく、ご自分の思いのままに教えよう、とお思いになつていたのに、叶う感じにちがいない。男手のお教えなので、多少男馴れたところがあるかも知れない、と思つて不安である。

この数日來のお話、お琴など教えて一日過つてお出かけになるのを、い

つものと、残念にお思いになるが、今ではとてもよく躡けられて、むやみに後を追つたりしない。

大殿では、例によつて、直ぐにはお会いなさらない。所在なくいろいろとお考え廻らされて、箏のお琴を手すさびに弾いて、

「 やはらかに寝る夜はなくて」

とお謡いになる。大臣が渡つていらして、先日のお宴の趣深かつたこと、お話し申し上げなさる。

「 この高齡で、明王の御世を、四代にわたつて見て参りましたが、今度のようになつて文類が優れていて、舞、楽、楽器の音色が整つていて、寿命の延びる思いをしたことはありませんでした。それぞれ専門の道の名人が多いところに、お詳しく精通していらして、お揃えあそばしたからです。わたくしごとき老人も、ついつい舞い出してしまふそんな心地が致しました」と申し上げなさると、

「 特別に整えたわけではございません。ただお役目として、優れた音楽の師たちをあちこちから捜したまでのことです。何はさておき、柳花苑は、本當に後代の例ともなるにちがひなく拝見しましたが、まして、栄える春に倣つて舞い出されたら、どんなにか一世の名譽だつたでしょうに」

とお答え申し上げになる。

弁、中将なども来合せて、高欄に背中を寄り掛らせて、めいめいが楽器の音を調べて合奏なさる、まことに素晴らしい。

「 第五段 三月二十余日、右大臣邸の藤花の宴 」

あの有明の君は、夢のようにはかなかつた逢瀬をお思い出しになつて、とても物嘆かしくて物思いに沈んでいらつしやる。春宮には、卯月ごろにご予定になつていたので、とてもたまらなく悩んでいらつしやうたが、男も、お捜しになるにも手がかりがないわけではないが、どちらとも分からず、特に好ましく思つておられないご一族に關係するのも、体裁の悪く思い悩んでいらつしやるところに、弥生の二十日過ぎ、右の大殿の弓の結があり、上達部、親王方、大勢お集まりになつて、引き続いて藤の宴をなさる。花盛りは過ぎてしまつたが、他のが散りつてしまつた後に」と、教えられたの

であるうか、遅れて咲く桜、二本がとても美しい。新しくお造りになった殿を、姫宮たちの御着の儀式の日に、磨き飾り立ててある。派手好みでいらつしやるご家風のようで、すべて当世風に洒落た行き方になさっている。

源氏の君にも、先日、宮中でお会いした折に、ご案内申し上げなされたが、おいでにならないので、残念で、折角の催しも見栄えがしない、とお思ひになって、「ご子息の四位少将をお迎えに差し上げなされる。」

「わたしの邸の藤の花が世間一般の色をしているのなら、どうしてあなたをお待ち致しましょうか」

「宮中においでの時、お上に奏上なされる。」

「得意顔だね」と、お笑いあそばして、

「わざわざお迎えがあるようだから、早くお行きになるのがよい。女御子たちも成長なさっている所だから、赤の他人とは思ってまいよ」

などと仰せになる。御装束などお整えになって、たいそう日が暮れたころ、待ち兼ねられて、お着きになる。

桜襲の唐織りのお直衣、葡萄染の下襲、裾をとて長く引いて。参会者は皆袍を着ているところに、しゃれた大君姿の優美な様子で、丁寧に迎えられるお入りになるお姿は、なるほどまことに格別である。花の美しさも圧倒されて、かえつて興醒めである。

管弦の遊びなどもとても興味深くなさつて、夜が少し更けていくところに、源氏の君、たいそう酔つて苦しいように見せかけなさつて、人目につかぬよう座をお立ちになった。

寢殿に、女一の宮、女三の宮とがいらつしやる。東の戸口にいらつしやつて、寄り掛かつてお座りになった。藤はこちらの隅にあつたので、御格子を一面に上げわたして、女房たちが端に出て座つていた。袖口などは、踏歌の時を思い出して、わざとらしく出しているのを、似つかわしくないと、まずは藤壺周辺を思ひ出さずにはいらつしやれない。

「苦しいところ、とてもひどく勤められて、困っております。恐縮ですが、この辺の物蔭にでも隠させてください」

「と言って、妻戸の御簾を引き被りなされると、

「あら、困りますわ。身分の賤しい人なら、高貴な縁者を頼つて来るとは聞いておりますが」

と言つ様子を御覧になると、重々しくはないが、並の若い女房たちではなく、上品で風情ある様子のはつきりと分かる。

空薫物、とても煙たく薫らせて、衣ずれの音、とても派手な感じにわざと振る舞つて、心憎く奥ゆかしい雰囲気は欠けて、当世風な派手好みのお邸で、高貴な御方々が御見物なされるといふので、こちらの戸口は座をお占めになっているのだらう。そうしてはいけないことなのだが、やはり興味をお惹かれになって、「どの姫君であつたのだらうか」と、胸をときどきさせて、

「扇を取られて、辛い目を見ました」

「と、わざとのんびりとした声で言つて、近寄つてお座りになった。

「妙な、変わった高麗人ですね」

と答えるのは、事情を知らない人であるう。返事はしないで、わずかに時々、溜息をついている様子のする方に寄り掛かつて、几帳越しに、手を捉えて、

「月の入るいるさの山の周辺でうろつろと迷つています。かすかに見かけた月をまた見ることができようかと、なぜでしょうか」

「と、当て推量におつしやるのを、堪えきれないのであらう。」

「本当に深くご執心でいらつしやれば、たとえ月が出ていなくても迷うことがありましようか」

「と言つ声、まさにその人のである。とても嬉しいのだが。」

